

論文の内容の要旨

論文題目 文明と希望 近代日本における「雑草研究」  
Civilization and Hope: "Weed Study" of Modern Japan

氏名 ガブラコヴァ、デンニツァ・ステファノヴァ  
Gabrakova Dennitza Stefanova

「雑草」と「草」をモチーフにした文学的・文化的表現に注目することによって、日本近代文学を貫く想像力の系譜を浮き彫りにし、「雑草」のイメージで読み解くことのできる作品群の系譜に光を当てるのが、本論の第一の目的である。次に、このイメージが、激変する世界において、近代文明に対する不安と希望に結びついていることを明らかにすることが、本論の第二の目的である。最後に、「雑草」というイメージが、作品の内容に止まらず、「雑草」を扱った文学作品の形式に及んでいること、つまり「雑草」のイメージの性質や伝達が「雑草」的であることを示し、「雑草」のイメージの共有を通して比較文学的研究の可能性を探ることが、本論の第三の目的である。

まず、与謝野晶子の詩から着想を得た魯迅の『野草』に焦点を当て、「野草」を激変の中における「希望」の心理の文学的イメージとして位置づける。「希望」は本論を貫くモチーフ（文明の進歩を表すプロメテウス神話との関係において）になる。同時に「野草」は「故郷」に対する郷愁を「子供」への「希望」に託したものと解釈できるもので、本論における「雑草」のイメージと「故郷」や幼児回帰の関係をも反映している。魯迅の『野草』は文学作品そのものを表す比喻でもある。

本論は大きく三部に分かれているが、それぞれの部分は、近代的な内面的主体、近代的国民国家と、そこに埋め込まれる「故郷」、そして、第二次世界大戦の断絶によって同時に生じた「世界」の概念と、近代的主体や国家への反省を、大まかな背景にしている。

第一部、「温室の雑草園」では、北原白秋の詩的活動を手掛かりに、「雑草」が現れる空間を内面との関わりで論じている。白秋の詩に現れる「雑草園」は夢に類似した内面的な空間を造形するためのイメージである。「雑草園」は『屋上庭園』という白秋他主催の雑誌に嵌め込まれ、『屋上庭園』編集の活発な詩的活動は都市空間の「雑草園」、小石川植物園の中に埋め込まれる、入れ子の構造を持つ。詩の中にさえ「温室」や「雑草園」の縮小図、ガラスの器が見出される。そのような自己言及的入子型の内面の探求は、それ以上開けることのできない不透明な核（「種子」）、内面的空間の最小単位に辿りつく。その動きは、白秋が『思ひ出』という詩集で扱っている記憶の詩法によって、自己の内面的空間の奥底に埋め込まれている「故郷」（柳川）と「子供」に到達し、詩的想像力は「外」（共同体への帰属感、自然という共同の故郷）に向かっていく。

第一部が内面への覚醒、そして内面という「夢」への探求を辿るのであれば、第二部、「雑草の季節」は、こうした閉ざされた内面が外の世界と関係をつぶす欲望による「自然」への目覚めを分析する。与謝野晶子の社会評論では、性欲、政治欲、そして詩人としての製作欲がお互いを貫き、近代女性の覚醒と結びついていく。晶子に見られる「性欲」、「政治欲」、そしてそれらを統括する詩人としての「製作欲」の相互内包は、抑圧と噴出の具現化である「雑草」を、性（内面）や政治（共同体）が融合したものとして捉えなおすきっかけとなる。

晶子が「雑草」の生い茂るに任せた庭に向ける眼差しは、これまで注目されたことのない白秋の散文を照らし出している。白秋に対する晶子の言及は1929年のエッセーでなされているが、彼女の「雑草」を扱った最も早い詩「雑草二篇」（1915）から十年以上の隔たりのある。その間には関東大震災という大きな亀裂があるのにも関わらず、「雑草」への関心と共に、「雑草」のイメージが残存していることと共に、その亀裂を補う希望もここから感じ取ることができる。白秋の散文「雑草の季節」が震災の翌年の夏を描いたものであるのはそのことを暗示している。「温室」の「雑草園」のような閉ざされた内的空間から、牢獄からの開放のような開放感が、「雑草の季節」のみではなく、それが属している「季節の窓」という白秋の散文集などに充たしている。白秋において、閉ざされた夢から覚醒することの心理は既に『雀の生活』に見られる。震災後の開放感に対する白秋の喜びは、生命への喜びと共に、閉ざされた内面からの自然と共同体への脱出を表している。この想像力の延長線上にあり、そしてその頂点をなすのは前田夕暮（『緑草心理』）による「雑草」の文学的イメージである。白秋の描いた夕暮の肖像が『緑草心理』のイラストになっているという二人の関係、そしてそれに類似した「雑草の美」を歌った相馬御風と「雑草」を描いた日本画家郷倉千穂の関係を、この第二部で見ることによって、「雑草」への共有された関心がいかに他者と自然との関係を築く時に機能しているかを考える。生命主義、民主主義その他、色々な意味で覚醒状態として捉えられる戦間期は、ますます高まる「故郷」という国家への（無）意識によって、新しい夢、「起きていたという夢」に繋がっている。以上も素描した「雑草の季節」の時期は子供の発見として位置づけられ、児童文学が盛んになる時期である。晶子も白秋も子供を相手に文学を書くが、ここで問題になっているのは夢と覚醒の複雑な関係と回帰不可能な「故郷」を表現しようとする「子供」の表象である。相馬御風の『雑草苑』などの分析はこうした視点を裏付けていると同時に、「雑草」のイメージを、不毛な「希望」として相対化させてもいる。

第三部「不屈の草」の中では第二次世界大戦後を扱う。「不屈の草」はカミュの『地獄のプロメテウス』からの引用で、プロメテウスの神話が子供の救済の希望の形で再現される時期を指す。魯迅から影響を受けたに違いない太宰治の「希望」、さらに太宰がプロメテウス神話にある「パンドラの匣」を、玉手箱と結びつけたことを通じて、大庭みな子の『浦島草』に繋がる、夢と覚醒をめぐる想像力を明確に見るため、太宰治の『パンドラの匣』の分析を行なう。太宰の作品と類似した病と死の空間を舞台にした福永武彦の『草の花』を通して、「草」のイメージと第二次世界大戦の語り方の関係を再確認する。その他に、野呂邦暢の『草のつるぎ』の中の国家と土の間、さらに戦時中と戦後の間に動く「草」としての自衛隊のイメージを視野に入れる。太宰と福永の作品は結核のサナトリウムが舞台であるから、死と深い関係にある生の体験の空間的な次元の文学的構築として解釈できる。野呂の作品では死の限りなき接近の感覚は、自衛隊の駐屯地によって空間的に再現されると言えるし、野呂の「草」の用い方に幼年期の記憶を喚起する「故郷」から全人類が共有している「故郷」の表現までを見ることもできる。両方の場合において、病や戦場訓練という体験を通して自己の輪郭は「共同体」の中に溶解していく。その感覚は大庭みな子の作品群では、さらに深まり、世代や国籍や性差を問わず、生命によって結ばれている複数の人間同士の総数のイメージに発展していき、太宰、福永、そして野呂の作品から、「草」のイメージによって齎された物語の自己言及性（日記形式、手帳形式）を見ることもでき、それは大庭みな子の作品における物語的な入れ子構造とも類似している。

#### ガブラコヴァ論文要旨

最後に、大庭みな子のエッセー、詩、小説を例にとって、「雑草」や「草」のイメージの戦後を論じる。『浦島草』の中で語られる第二次世界大戦の記憶と浦島草という「草」、そして夢と覚醒の間に実感される隙間は、「故郷」と「子供」を喚起しながら、大庭の言葉では「夢」である文学作品によって自己言及的に強調されているのである。過去に埋もれた悪夢に対する共有された無言の記憶としての「草」は、『浦島草』の原型である『ふなくい虫』の中で無理やりに抑圧された生命、「雑草」としての胎児のイメージに遡る。『ふなくい虫』では、痛々しい体験とはいえず、「故郷」に繋がる「雑草」は第二次世界大戦後の世界とでも解釈できる抽象的な空間、「温室」とのコントラストで際立っている。「雑草」に象徴される抑圧されたもののイメージ群を追い、『花と虫の記憶』に見られる「故郷」と自然に憧れる、都会的な現代人の孤独、現代女性の自由と孤独と「野草」のイメージに辿りつくことができる。最後に、「雑」なジャンルである随筆集『野草の夢』を通して、魯迅の『野草』の存在の意味と文学表現の奥に潜む生命の種子のイメージに触れる。

以上三部の大きな流れの間に、さらに「雑草」を「園」として統御させるメカニズムを対象にした、二つの考察を挟むことにする。日本における幼稚園教育の先駆者倉橋惣三の『幼稚園雑草』を切り口に「植物園」の一種としての子供の園の空間の構築に込められた希望を、やはり「雑草」のイメージで解くことができる。「小国民」を幼稚園の枠内に入れる考察の次に、国民主義に向かう時期の「国民」の動員を「雑草」のレトリックで考える。そこで「雑草」の対語である「雑木」とその限定された領域「武蔵野」を日本の比喩と解釈し、戦争中に形成される「武蔵野雑草界」の愛国主義や戦後の皇居を「野草園」や「武蔵野」の縮図として語る語り方に注目する。

「雑草」が文学的、社会的、政治的言説の間の隙間を思いがけない形で潜り抜け、多数の詩人や作家の表現の中に姿を現し、見えないところに複雑な関係性の網の目を織りなしている。与謝野晶子の詩「雑草」は魯迅の散文詩集『野草』と繋がり、魯迅の『野草』は大庭みな子の『野草の夢』と結びつく。そのルートの意外さは「雑草」のイメージの伝達の特徴であり、文学的営みの核心に迫る、自らを裏切ってしまう表現や表現できないものの表現への「不屈」の努力のイメージでもある。